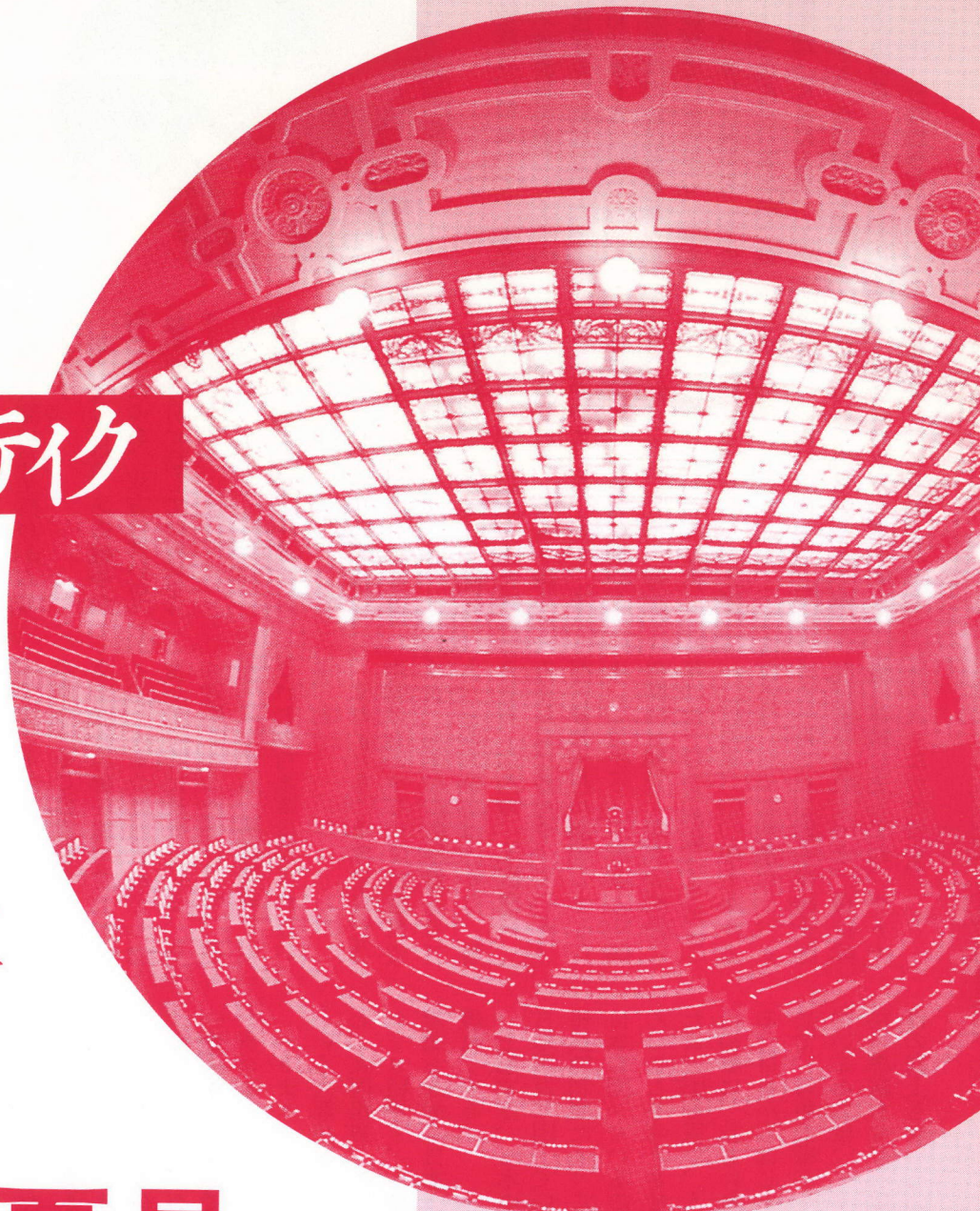
女だから、政治！

Femme Politique

ファム ポリティク



1995年夏号

CONTENTS

太平洋戦争とは「侵略」だったのか？ …… 2
地震学者にできること・できないこと …… 8
女性議員のページ／紀平てい子・小枝すみ子 ……10
若さが変える地方議会 ……12
書評「立ち上がる地球市民」堂本暁子著 ……16
包装法の素顔 ……17

写真・秋本實

太平洋戦争とは「侵略」だったのか？

インドネシア・センター
中島慎三郎
「わいふ」副編集長
和田　好子
司会
ファム・ポリティク編集長
田中喜美子

―戦後五〇年たって、社会党が不戦決議を出し、その内容に自民党が反対して大揉めに揉めてました。

私たちは戦後民主主義の教育を受けていますから、日本がバカバカしい戦争をして負けちゃったんだ、基本的に侵略戦争だったんだと思っている。しかし、そう思ってはいない方もある。ところがその言い分が、侵略戦争だと思っている人間には全然わからないんです。

そこで今日は、あの戦争が何だったのか、双方の言い分、根拠を存分に話していただこうと思います。

軍隊で学んだこと

中島　僕はね、昭和一四年一二月に学生で召集されたんです。衛生兵になった。

僕は野砲第一連隊に入隊したんです。中学以上を出た青年が集められ、ソビエト語の研究をやっていた。まず、それに驚いた。二番目に驚いたのは、明治三八年式の野砲（大砲）ですよ。こんな古いもので戦えるのかしら、と思いましたね。

まず、中国の広東へ行った。

次に行ったのは廣西省の南寧。そこは日本軍が壊滅的な打撃を受けながら戦ったところです。そしてベトナム近くの憑祥。そこは援蒋ルートで、文字通りの第一線です。ハノイ、ハイホンからどんどん物資が蒋介石に流れている。その遮断にいったわけです。憑祥へ入ったら、援蒋物資の山。これじゃ日本軍はかなわないな、と。

それよりもっと驚いたのは、中国のものすごい反日教育ですよ。小学校の教科書を見ても、日本の悪口ばっかり。蒋介石軍、広西軍、毛沢東軍、みんな反日教育やっている。河村参郎少将が演説しましたよ。「不幸にして日本と中国の関係は憎悪、対立の関係になった。（これが解けるには）一〇〇年も二〇〇年もかかるだろう。じつに残念だ。ベトナムへ行ったら君らは紳士的な態度をとれよ」と。僕は非常に感動しましてね、ベトナムへ入ったわけです。

ベトナムへ入ったら、これ以上の貧乏があるかというような生活をしている。僕は衛生兵だから、栄養失調だとすぐわかりました。ベトナムで、一番大きく搾取していたのはフランス人、次が華僑なの。

ベトナムの次が上海。上海という大都会はスゴイんですわ。共同租界、イギリス・フランス租界…、ものすごい。建築も港湾も日本よりずっと優れている。

上海では、日本の軍事費で日本国民は困っているのか、植民地制度によってアジアも日本も困っているのか、いろんなことを考えさせられましたよ。国を思い、人類を思う人の中に、左もいれば右もいる。日本からはじまって中東まで、有色人種が全部独立しないことには、アジアには人格の尊厳もなければ経済、教育の向上もないという議論があった。もう毎日、毎日、共同租界を材料に語ったものです。いい勉強になりましたね。

和田　上海へは何年にいらしたのですか。

中島　昭和一六年一月です。

―軍隊のことを何も知らないので教えていただきたいんですが、兵隊さんの中で、そういう話を日常的になさることがあったんですか。

中島　ええ。日本の部隊には知識人もいたからね。みんな、日本の国はどうなるのか、アジアはどうなるのか、話してましたよ。

浙江省寧波の財閥には、日中が喧嘩しちゃ損だ、ソビエトを抱き込んで英米と戦うべきだ、という意見が非常に多かった。こりゃ、えらいことになるなと思った。というのは、日本の武器は貧弱なんですよ。

明治三八年式の野砲、小銃

です。最新式の武器、トラックがないんです。三八式小銃はね、ポチン、ポチンとしか撃てないの。一番最新式の武器は自転車だった。

―エーッ？　日本軍は、そのポチンポチンとしか撃てない小銃を使ってたわけですか。

中島　使ってた。可哀相な国なんです。軍艦とか飛行機とかは、非常に優れていたけど。

東南アジアは全部味方!?

中島　蒋介石軍に武器を提供しているのは南洋華僑でした。まず献金で金を送る。次は献納で飛行機だとか大砲だとか、トラックなどを送る。その次が献身で技術者がどんどん来て働いているんですよ。蒋介石政府の戦費の三分の一は南洋から来ていたんです。

和田　マレーのほうへは行かれたんですか。

中島　シンゴラという南部タイの海岸に上陸しました。

日本が一番ほしかったのは石油、それからゴム、スズ、キニーネなの。ここで考えていただきたいのは、ジャワ攻略はわずか九日間です。これは非常に大きなクウェッションですよ。つまり、大東亜戦争が侵略戦争か否かを解くキーポイントですわ。

和田　どういうことでしょう？

中島　つまり、味方がたくさんいれば戦争は早く終わる。敵が多いとうまくいかない。中国で日本がうまくいかなかったのは、徹底した反日教育をしていたからですよ。

ベトナムへ僕らが進駐したときは、たったの三時間。周りは全部味方なんだから。ジャワではみんな待っていたわけです、日本軍が来るのを。ニワトリだとかバナナだとか、いろんな物をくれる。大東亜戦争は、そこを見ていかなきゃ駄目だと思うね、僕は。

和田　なるほど。

―実際の状況としては、てんでんバラバラ、国によって違ったということですね。

中島　もっと極端なことを言えば、中国とは本当に戦争をしたけど、東南アジアは全部味方だった、そういうことでしょうね。タイ、インドネシア、インド、これはわれわれよりももっと熱っぽいですよ。

―どういう意味で熱っぽいんですか。

中島　独立したい、日本がやってきたらチャンスだ、有り難い、そういうことです。それが今日までずーっと続いている。シンガポールの前首相リー・クワンユーは日本に学んでやっていこうと考えたし、マレーシアのマハティール首相は「ルックイースト」政策で、日本、韓国を先生にやっていこうと言っている。一九六七年にASEANができたのも、そういうことです。

大東亜戦争のことを侵略戦争だと言う人は、共産主義者と社会主義者に多いんです。東南アジアでもヨーロッパでも、日本でも。ところが、自由民主党系の人たちがアジアにもたくさんいます。その人たちは「自分たちは非力だった。そこへ日本軍がきてオランダやイギリスを追っ払ってくれ、われわれのために戦ってたくさん死んでくれた。お金のない日本が教育に多くのお金をかけてくれた。技術教育も、軍事教育もしてくれた。申し訳ない」と。これは政府の中心をなす学者が言っています。

戦争って、いったい何？

和田　私は終戦のときに一六歳で、いわゆる動員された女学生の世代です。学業をやめさせられて、陸軍の弾薬庫で火薬を詰める作業をしていた。そのうちに事務にまわってしまったんで、直接の被害はあまり受けなかったんですが、なかには中毒になったり、爆発事故で脚をなくした人がいました。

わたしは東京生まれの人間ですけれど、父が仕事の関係で横浜におりましたので、戦争中は横浜で過ごしました。女学校も横浜で通っていた。

私自身の戦争体験としては、特別ひどい目にあったわけじゃないんですね。とにかく飢えはイヤというほど味わいましたけれど。

空襲には横浜であいました。家が丸焼けになって、私は学校へ行ってたんで助かった。電車はもちろん止まりましたので、三二キロの道のりを歩いて帰ったわけです。

当時私が通っていた女学校の校長は千葉の大地主の息子で、相続した財産を売り払って世界を三回漫遊した人なんです。大正時代のことです。アメリカの教育を視察して帰ってきた。それで自分で学校をつくったんですね。

そんな学校ですから、軍国主義教育がひどい形では乗り込んできていなかった。しかし戦争になれば当然右翼の教師が出てきます。職員室には、校長がアメリカへ視察に行ったときの写真が飾ってあった。右翼の教師たちが校長に抗議したら、校長は「投票で決めよう」と言ったそうです。

中島　はァ～、珍しい人ですねえ。

和田　校長は投票で負けたので、写真を下ろした。

公立の学校では恋愛小説はいけない、欧米の本はいけないとか、いろいろ規制があったそうですが、私の学校では全然なかった。

そんな中で私は自由に歴史の本などを読んでいるうちに、この戦争というものはいったい何なんだろうか、と考えざるを得なかったんですね。友だちは脚を失うし、家は焼かれるし、東京は焦土になる。なぜこんなことになるのか、非常に疑問に思いました。

終戦の日から何日かたって集まったとき、その校長がいきなり「私は戦争中に言ったことを一言も改めない。みんな昨日まで言っていたことをクルッと変えているけれど、私は変えない」と言いました。私はその時、知識というものの力を本当に思い知らされ

ましたね。知識があればこそ言えたんであって、知識のない人間は今ウロウロしているんだ、と。女学校時代、知らず知らずのうちに私は、国際的視野でものを見ることを教わったと思います。

戦争は大きな象だ

和田　戦争体験に関してよく言うんですが、じつは戦争で肥え太った人もいるし、全然被害を受けなかった人もたくさんいる。そういう人たちの場合は、また考えることが違っているだろうと思います。

　私の戦争体験はここまでですが、次に大東亜戦争で何があったのかという話題に入りたいと思います。

中島　名称だけ取り上げますとね、イギリスでは「第二次世界大戦」です。ヨーロッパ戦線が七〇％、アジア戦線が三〇％ですからこれは当たり前ですよね。アメリカは太平洋で全力投球したから、「太平洋戦争」。そういう意味では日本が大東亜戦争というのも当たり前なわけです。

和田　戦争をやった場所によって名前が違ってくるわけだ。

中島　戦争は大きな象みたいなもので、耳をつかまえてどうとか、尻尾をつかまえてどうとか、言い方はいろいろあると思う。名前が一つじゃなきゃいけないというのは、ずいぶん硬直した見方だと思いますよ。

―ともかく、統一するのが好きよね。日本て。

中島　今、泡食ってね、戦争はこうだったと決めつけるより、僕はもっと研究・調査・勉強する時代だと思うなあ。

　僕ら四～五年前にイギリスへ行ったんですよ。ジャワの当時の作戦参謀や学者に会ったんだけど、こう言うんです。戦争はナショナルインタレストで戦うんだから、真相なんて言えるか。知ってたって言わない、と。まあ、資料を出すのは一〇〇年先だと言うんです。

和田　私の娘は台湾や中国の人たちと交際があるんですが、上海の人が最近日本に来て、「戯夢人生」という台湾映画を一緒に見に行った。それは日本の戦争中と重なっている時代の話で、上海の連中がおったまげてね、「こんなに日本のことをよく描くなんておかしいよ」と騒いだそうです。

　映画のパンフレットを読むと、要するに台湾は合法的に日本に割譲されたんだと。むしろ台湾を売ったのは中国なんで、中国のほうに怨みがある、みたいなことが書いてあるわけです。私は「へェ～、こんな考え方もあるのか」と思った。もしかしたら中国の植民地であったときよりも、日本の植民地時代のほうがよかったのかも知れない。

　ですから、歴史は一筋縄ではいかないんですよ。いけないのは、みんなが歴史を自分の実感で語りすぎること。個人の実感はいいんですが、それで全体を判断するのは危ない。

中国、韓国だけがアジアじゃない

和田　ことは政治絡みなわけです。つまり日本政府が、今後どんな態度でアジア、欧米に対していくか。やはり政治の次元で考えていかないと間違うんじゃないか。

中島　そこんとこで、僕は二つのことを言いたいんですが、朝日新聞でも何でも、アジアがこう言っているという時はね、中国と韓国のことだけなんですよ。まあ足しても東南アジアの反日華僑ぐらい。

　さて、中国と韓国をよく見ますとね、発言の自由がない国なんです。国内政治に対して発言ができない。自分の生命、財産にかかわってくる。だけど日本のことはいくら悪く言っても構わないんです。かえって褒められる。そういう実情をしっかり見ないといけないと思う。

　もう一つは、中国は白髪三千丈の国なんです。それをよく理解しなきゃいけない。

和田　そうですね。大袈裟にいいますからね。

中島　僕らがシンガポールで戦争博物館へ行ったとき、早稲田大学を出た通訳が、日本兵に中国人が二〇万人殺されたと言うんですよ。「あんたね、二〇万人ということはあり得ないんだ」と。三〇〇人の河村部隊が三八歩兵銃で、三日間でどうして二〇万人も殺せるかと。

　沖縄戦では、アメリカ軍の一千隻の艦艇が毎日艦砲射撃をして、のべ何万機もの飛行機が爆弾を落とした。一坪に二五〇キロの爆弾が一つずつ落ちたわけです。つまりね、アメリカの軍隊は七〇日かかって二〇万人殺したわけです。

　それがたったの三日間で、ポチンポチンの三八式歩兵銃で二〇万も殺せるか。

　そういうことを向こうの華僑は平気で言う。僕は兵隊だからスパッと反論しますけど、普通の日本人はそれでガック

リきちゃう。そんなひどいことをしたのかって。そういう中国人の誇張好きな体質をもう少し勉強なさったらどうか。

この間ヨーロッパへ行くときね、飛行機の中で僕の隣にいた韓国の女性が、うちの国はカラッとしていないんだ、怨みの哲学があるから日本の悪口は永久に言うよ、と。だけど周りに人がいなきゃ、日本に憧れているし尊敬している人がたくさんいる。韓国がアメリカのような政体になったらもう少し日本を褒めるだろうが、今はこれっぽっちでも褒めようものなら周りからグワァッとやられてしまうんだ、と言っておりましたね。

だから、アジアは中国と韓国だけじゃない。もう一歩進めて言えば、世界中で一番日本を誤解し、非難するのはどこかって言ったら、日本ですよ。その次が韓国、中国。それから南洋の反日華僑、アメリカ。もうベトナムへ入ったら全然違う。

最近、ベトナムの総理大臣が日本に来たでしょ。大東亜戦争はアングロサクソンが戦ったんだ、われわれもアングロサクソンと戦った、日本は世界で一番貧乏になったのに、二番目の金持になって援助してくれる。われわれも「おしん」と同じように努力する。閣僚で「おしん」を見ない者はいないって言っていた。

天皇絶対主義のもとに総発狂

和田　私は、中島さんのおっしゃることに賛成の面はあるんですよ。つまりアジアの中にもいろいろある。それは確かだと思います。ただ解釈が違う。

どう違うかと言うと、まず最初に日本が侵略したのは韓国です。日本は列強に学んで近代化をなし遂げねばならないと思っていた。植民地がないと幅がきかない。国内の経済問題の解決策としても植民地が必要だった。

そのためにどうしたかというと、韓国と条約を結んで、合法的に輸入関税免除の特権を得たわけです。「朝鮮側に裁判権がない」のをいいことに、違法行為すれすれのことをやりながら、投機的な商業活動をいろいろやった。

そのために朝鮮経済が壊滅的な打撃を受けてしまった。日本は自分のやったことを悪いと思っていないから、まごまごしているうちに民衆が大反乱を起こしちゃった。で、権益を守るために朝鮮へ出兵する。朝鮮側にも日本派と中国派がいて、双方喧嘩になってくるわけです。これが日清戦争の起こりです。

日本は、中国がヨーロッパ列強に持っていかれることに危機感があった。ソ連は南下してきて満洲を押さえようとしている。ソ連に朝鮮まで取られて防衛線を突破されるのではないか、という不安感があった。結局日本は世界列強と同じ土俵の上で争って、得をしたかった。しかし日本は出遅れた資本主義国で、それ以前に列強のほうは知恵がついていたわけです。

中国を分割するとき、彼らは金縛りにした。借款を与えて、払えなきゃ取っちゃう。またはお金で租借地を買ってしまう。ロシアも借款を与えながら、だんだん満洲へ南下してきたわけです。

日本もそれをやりたかったけれど、いかんせん金がない。借款を与えるどころじゃない。で、軍隊を送って占領するという方向にいかざるを得なかった。

ここで一番の問題は、天皇に統帥権が属していて、議会や内閣は憲法上軍事に介入できないことです。天皇を補佐するのが陸軍大臣と海軍大臣となれば、軍部が勝手に動いて戦争しちゃう。しまいに皇国史観なんていう神がかりのイデオロギーが出てきた。あの時の日本は、天皇絶対主義のもとに結集して、総発狂していたと思うんですよ。

インドネシアやベトナムに入ってから間もなく、日本は負けてしまった。もし勝っていたら、どうなったか。いま幸いにして向こうで日本の人気が悪くないならば、今後はその人気を落とさないようにすることが大事です。

韓国や中国にしても、これ以上彼らを傷つけるような原因を作らないことが必要だと思うんですね。最終的には、今上り坂になっているアジアの国々と、うまくやっていけるかどうかという問題に帰着する。そういうビジョンなくして、ただ謝るだの謝らないだのと言うのは感情論だと思います。

謝るべきか、べからざるか

―今、不戦決議に反対していらっしゃる自民党の方々は、韓国・中国で日本がやったことに対して、謝らなきゃいけないと思ってはいらっしゃらないんですか。

中島　あの人たちも僕たちも、バランスを考えているの。いいとこはなんだ、悪いとこはなんだと。国家間の関係は弱肉強食、ナショナルインタレストが基本戦略です。

でも戦後の日本人は道徳的で内省的だからね、自分の悪いとこから勘定していくわけですよ。よその国は自分の悪いところなんか全然言わない。

僕は、日本が弱み（謝罪の連発）を見せれば、ムチャクチャに賠償をとられて潰されてしまうんじゃないかと思う。

中国問題にしても、もう少し研究したらどうかなという感じがする。例えばさっきの南京問題ね。

和田　これは政治問題なんですよ。南京でやれ二〇万殺した、三〇万殺したという議論をするよりも、どうしたら日本がみんなに好かれるか。それを言うべきです。

中島　イヤ、僕は反対でしてね、中国は白髪三千丈だと、あまりにも非常識だと。ここぐらいまでは、みんなが知ったほうがいいと思う。

マレーシアのマハティール首相は、五〇年前のことを言うなら二〇〇年前のイギリス、三〇〇年前のオランダ、五〇〇年前のスペインはどうなんだ、後ろを向かないで、これからどんなふうに仲よくしていくか。それを考えようじゃありませんかと言ったのね。そういう話ならばね、僕はいろんな話し方ができると思う。

和田　とにかく、こういう問題は政治的に考えないと損しますよ。むこうは海千山千だからうまいことやるけれども、日本は下手。

中島　世界一下手です。

和田　それを改める方向にいかないと、非常にやっかいなことになる。私は、政治が弱肉強食であっていいとは思いませんけれど、世界分割の大戦争を二度やって列強は共倒れしたわけです。それでアジアは独立できたんです。そこを認識しなければいけない。日本政府は独立を援助したんじゃなくて、植民地化を指向していたということです。

中島　それがね、違うんですよ。インドネシアのモハメッド・ナチールという元総理大臣は、戦争中に日本軍から教育を受けた人で、日本（姉歯準平）はわれわれを独立させるために来たって、こう言っているんです。そのへんが、むこうの人と日本人との違いです。

和田　証拠があがっていませんが…。

中島　あるんです。証拠は充分にあるんです。

とにかくね、上から下まで模範的態度をとれと、僕たち兵隊も朝から晩まで言われてましたから。これはアジアの解放戦争なんだと。

―誰でも戦争するときは聖戦だとか、建前としていいことを言いますでしょ。

中島　だけど、行ってみたら、むこうは待っていたんですよ。

和田　それまでひどい目にあっていたから、代わりの人間が来たことで期待を持ったんだと思うのね。

戦争にプラスの面はあるか

中島　例えばジャワではね、スカルノ時代の外務大臣ルスラ・アブドルガニーは、子ども時代からお母さんに「ジョーヨボーヨ」という物語を聞いていた。北方から皮膚の黄色い、体の小さい人間がやってきてわれわれを応援する、応援したらパッといなくなる。その伝説が六〇〇年間も続いていたんです。

あなたはお笑いになるけれど、われわれ日本人も神風を信じていたわけです。きっと神風は吹く。技術屋の僕でさえ信じていたんだから、インドネシア人が「ジョーヨボーヨ」を信じるのは当然なんですよ。

和田　残念ながら、日本が韓国と中国へいったときは完全に侵略の意図がありました。それをいいことであるというふうに言うのは、やっぱり危ないと思いますよ。

―いいことである、と言っている人は一人もいないと思うのね。ただ、今までの文部省の教育を見ていると、戦争に意味を持たせないようにしている。中国に日本兵が「進出」したとかね、歴史の教科書を読んでもいったい何のこっちゃ、子どもたちにわからないような教育をして、ぼやかそうとしている。それが納得できないんですよ。

和田　これはぜひ言いたいことなんですが、戦後、イタリアとドイツが国旗と国歌を変えたでしょう。日本は変えなかった。あれはやっぱりまずかった。

外国の慣習でいえば、政体が変われば国旗と国歌は変わるんです。日本も敗戦で政体は変わった。天皇は温存されたけど、社会組織は完全に変わった。あの時に国旗と国歌を変えていれば、かなり言い訳がついたという感じがする。日本は後始末をきちっとやっていないから、よけい突っつかれるんですよ。

中島　イヤ、僕はそうじゃないと思うな。時間がかかるから、いつかゆっくり話をするけどね、ドイツとフランスは千年戦争を続けてきたんです。アデナウアーの時に、平和にするにはどうすればいいか。まず、悪口合戦、お互いの過去をほじくり返すのをやめましょうや、と。それから、あの仲の悪いドイツとフランスが仲良くなったんです。

和田　それは戦後、ドイツがかなりちゃんと後始末をしたからですよ。

中島　ドイツは、ヒットラーが大量殺戮をしたからね。

和田　いやァ～、日本だって相当なことをやっていますよ。

中島　そんなこと、してませんよ。ヒットラーのようにガス室で何百万人も殺すようなことはしていません。

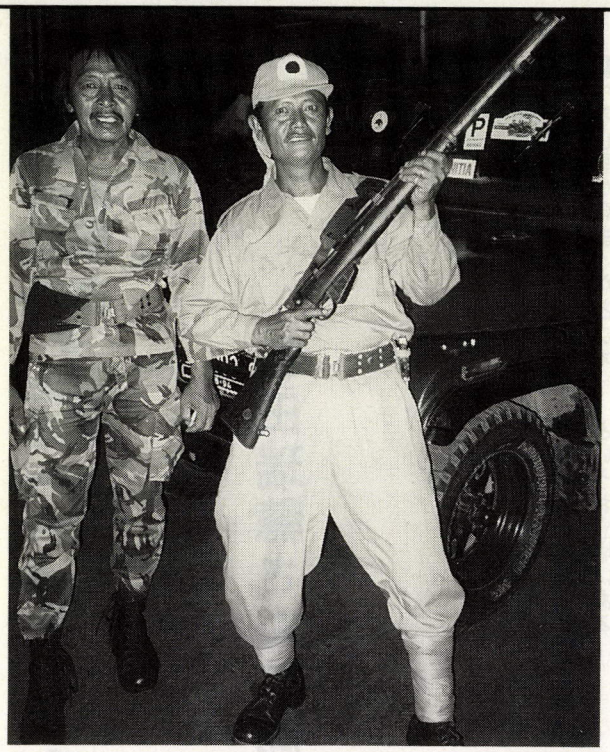
和田　そういうことを言ったら、すごくマズイと思いますよ。

中島　マズイというより、本当なんだからね。ヒットラーの本質と日本民族の本質と違いますよ。

和田　しかし、日本が韓国や中国でやったことを、あなたは具体的に全部ご存じなんですか。

中島　僕は中国と韓国のことは全然知らないの。

和田　でしょう。文句を言ってくるのはもっぱら韓国と中国なんですよ。政治的決着をちゃんとつけていないから。



中島　僕が言いたいのはね、もう五〇年もよってたかって病気のように、中国と韓国のことばっかり。戦争のプラスの面を見ようとしない。アジアを見ようとしない。そういう偏った態度が問題だと言っているの。

和田　戦争にプラスの面があったなんて言うのはマズイんじゃないですか。

中島　イヤ、ありましたよ。あの戦争がなければ、日本人はアジアのことはわからなかったと思う。僕のようなインドネシアのエキスパートは生まれなかった。

和田　とんでもない話ですよ。戦争でやったことを美化するなんて。やられた方は大変ですよ。私はその説には絶対不賛成ですね。

中島　いいことも悪いこともあると言ってくださいよ。僕、悪いと思わないなんて一言も言っていませんよ。

不戦決議の是非

中島　戦後の大きな問題はね、兵隊に発言させなかったことです。この五〇年間、われわれが発言できる空気が全然なかった。戦友会へいくとわかりますけど、みんなオドオドしちゃってんのね。犯罪者のように見られている。

むこうの独立記念日で、（写真をみせながら）日本兵の恰好をしてくれるのよ。五万人の前でね、「日本の兵隊がわれわれに～してくれた」と感謝してくれたときは、僕、涙が止まんなかったね。民衆ベースではうまくいったという点が、中国と東南アジアとの最大の違いですわ。

―そういう現実があったことは、われわれも知らなきゃいけないでしょうね。

中島　僕がむこうで、みなさんに迷惑をかけてすまなかったねと言ったら、「来てくれてよかったよ。ジョーヨボーヨ物語があるから待ってたんだ」と、そういう話ができる。

―いくらむこうがそう言ったからって、戦争があったからよかったなんて、こっちは言っちゃいけない。言うべきことじゃない。

中島　僕だから言えるんですよ。僕はむこうの国の教育と衛生の面で貢献しているから。

和田　日本の政治家が言ったら大変なことになる。

―最後にここで不戦決議について論じていただきたいと思います。

具体的に不戦決議をするとなると、その中には当然謝罪も含まれてきます。つまり過去の反省の上にたって、歴史に対する評価がおこなわれるわけです。その場合、実際にどういうメリットがあるのか論じていただきたい。

和田　私は、本当の意味の国益を考えるならば、不戦決議をしたほうがいいと思う。軍事大国にはなりません、とアピールしておいたほうがいい。今は自衛隊の規模も大きいですからね。

要するに、不戦決議をしないで黙っていると、あの戦争を肯定しているんじゃないか、軍事大国になるんじゃないかと疑われても仕方がないと思います。

中島　不戦決議をしなきゃならない国というのはあるんですよ。それは、①米中ソのように核を持っている国、②兵器を製造してジャンジャン売り込んでいる国、③五〇万人以上の軍隊を持っている国、④第二次大戦後、ずっと戦争をやってきた国。まず、これらの国に不戦決議をやれと、日本は要望していかなきゃいけない。そしたら日本も不戦決議をします、と。それが第一点ね。第二点は、日本に好意的なアジアの親日国に、「どう思う？」とわからないことは聞くべきだと思うの。湾岸戦争のときだって、金を出す時、シンパの国に聞けば、いろんな答えが出ますよ。あの時、僕はアジアで聞いたんですが、金を出せと言った国は一つもなかった。

和田　あれはホント、出すべきじゃなかったですよ。

中島　しかもバカにされていますよ。日本はブッシュやフセインに対して、死んだ人間はどうなるんだ、状況を報告しろと聞くべきです。二〇万人爆死している民衆がいるんだから。

次にデメリットの問題ですが、細川さんの発言以来、全アジアが興奮しちゃってる。慰安婦、強制労働問題で、高齢の人たちが集まって、あっちでもこっちでも会議ばっかりやっているわけ。後ろ向きの声がマスコミを占領してしまって、真面目な、教育の話とか保健衛生の話が一つもできない。不戦決議は、当面の利益を考えたら、デメリットのほうが大きいでしょうね。

―国会では結局、いつもの形で玉虫色の決議になるんじゃないでしょうか。社会党はどう思って「不戦決議」を言い出したのか、そのへん考えが甘かったと思いますね。

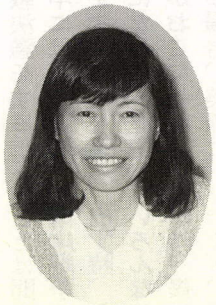
なかじま・しんざぶろう　大正八年生まれ。府立実科工業卒業。戦時中、南方各地を転戦。戦後、インドネシアを中心に民間外交に力を注ぎ、インドネシアセンター、ついでアセアンセンターを設立。『アジアに生きる大東亜戦争』（共著）などの著書がある。

まとめ・宮前　和

地震学者にできること・できないこと

石田瑞穂さんに聞く

鈴木由美子



阪神大震災に続き、サハリンでも大地震。地中からの奇襲への心配が高まったところへ、雑誌記事が不安をあおる。最近の週刊誌二誌を見ても「日本列島『大震災同時多発』の恐怖」、「サハリン大地震に連動か！　東京ほかここが地震空白域20ポイントだ」という具合。

センセーショナリズムに振り回されず、地震について正確な認識を持てないものか。

この春、日本地震学会初の女性会長に就任した石田瑞穂さんが「地震予知に対する学者と国民の意識の差は大きいので、一般の人たちに地震学者に何ができて何ができないのかを明確に伝えたい」と語っている新聞記事に心ひかれ、直接お話を伺うことにした。

石田さんは、つくば学園都市にある科学技術庁防災科学技術研究所の地圏地球科学技術研究部・地震活動研究室長というお立場にある。

そこへお邪魔したのは、二〇何年前に高校で地学の授業を受けた以外、地球に関する知識のない人間。素人考えを述べてどこがヘンかを診断してもらった。

―阪神の震災で活断層という言葉を覚え、雑誌の日本列島地図に走る活断層の筋を見て、わが家や親の家のあたりを通っているかどうか確認したりしているのですが、こういうのは無駄でしょうか？

「活断層というと今すぐにも動くかと思う、その認識が間違っているんですよ。活断層の定義は〝最近動いた形跡のある断層〟ということなんですが、最近というのは、最近百万年くらいを言っていて、日常感覚とはスケールが全然違うわけです」

―では、もし千年前の平安時代にそこで一度地震があったとしたら。

「いま動いたばっかり、という感じですね」

―活断層を動かす原因のほうですが、地震そのものはどう起きるのですか。

「地球の表面をおおっているプレートがしずみこむとき、重なりあっている隣のプレートと接している場所で力が全部解放されればいいんですが、力が残ってしまうと中のほうに影響が伝わる。そのときに割れた傷あとが活断層になるわけです。まだわかっていないことも多いのですが、プレートの運動であることは確かです」

―ところで世間では地震学者に予言者的能力を期待していて、阪神大震災を予知してくれなかったと責める論調がありますが。

「学者がもし地震予知が正確にできるなどと言ってたとしたら、学者が悪い。また、地震の予知は無理なんだということを、学者が伝えていなかったとしたら、それを言わなかった点での責任があると思います」

―地震の正確な予知はできない、と。では、実際に学者さんたちがいろんな研究調査をして、どこまでがわかるのでしょう。

「実際に地震が起きると学者が神戸へドッと調査に行きますが、起きた地震について調べるのと、地震予知とは、まったく違うことなんですよ。活断層については、昨年私たちも日本中の活断層の調査をして、それぞれ微小地震の震源と照らしあわせて、淡路島のあの断層についても、最大でM7・6程度の地震が起きる可能性があることは、わかっていました。しかし、可能性があるといっても、百年後か明日なのか、てんでわからないってことです。また同じ程度の可能性のある場所は、淡路島だけではなくて、日本中にいっぱいあるわけです」

庶民が恐れているのは、どこか自分が知らないところで地震予知が進んでいて、この都市はまもなく壊滅するとわかっているのに、住民のパニックを恐れて情報が隠されているということ。しかしこの話を聞くと、確実な近未来の悲劇が知らされてないということはなさそうだ。正真正銘、予知不可能なものらしい。

―結局、明日か百年後かというレベルでしかわからないわけですね。

「千年か二千年に一度動くようなものを、一〇年きざみというような細かい単位で当てるなんてこと、できるはずないですよ。近年に地震が何度か起きた場所では、周期があるとか言われますが、一回だけでなく、たまたま二回三回とくり返したとしても、本当に四回目五回目がくるかどうか、これもわからないんです」

―地震学者の中には、明確な予知ができるというニュアンスでものを言う人もいますが。

「日本中の地表にモニターをいっぱい貼って調べようとか、思い思いの方法でやっていますが、またどれも未知数なんですよね」

少し理解できてきた。地球のリズム、それも不規則な粗いリズムに対して、文明を持った人間の歴史は、小さすぎる。モノサシの一番こまかい目盛り一つよりも短いのだ。そんなミクロの世界からわかることは、限られているのだろう。

それでも、世間は地震情報に敏感だ。百年か二百年後かもしれず、何百年経ってもこないかも知れない、というような「可能性」が発表されれば、すぐさま「あそこは危ない」という噂になる。だから地震学者は、お互い同士で〇〇市という地名を使っていても、調査研究を発表する際には、△県東部とか、□湾北部などというあいまいな表現を使う。そうしないと、当の町に企業が進出してこなくなるなどの実害が出るのだという。

―人間に予知できないとしても、震災前に魚が暴れたなど、動物のほうに地震を予知する能力があるのでは。

「でも、動物が騒いだ直後に何も起きなければ、そのことを忘れてしまうわけですよね。震災前に犬が騒いだとしても、地震を感じとって騒いだのか、隣の猫に驚いて吠えただけなのかわからない。実際、阪神大震災直前に、こんな予兆があったという声を集めている学者もいますが、自分が夜中に目覚め背筋がゾッとして動悸がはげしくなったら早朝に揺れた、あれこそ地震の予感だったという葉書も来ているんです」

―背筋や動悸というのも、何も起きなければ忘れてしまうたぐいですね。うかがってると、人間は無力ですね。水害は妨げても、地震だけは予防できないですから。

「プレートを調べて、小さい地震を予め人工的に起こさせてしまえば、大きい地震が起きないようになるという研究をしている人もいるんです。でも小さい地震を起こす仕掛けをしたとして、それでドドッと大きい地震が起きてしまったら、いけませんよね」

―そんなのは絶対やめてほしいです。結局、私たちは、今いる場所にいて待つしかないのでしょうか。

「あまりにもわからなさすぎて、研究している私だって、妹に地震のことを聞かれたとき、高い所に重い品物を置かないようにして、家具も倒れないようにしたら、くらいしか言えませんでした」

―東海地震対策地域では、自治体のワクを越えて常時観測や防災対策をしている、それを日本中でやるとしたら、役立つでしょうか。

「役立つと思いますよ。神戸の家は、台風対策で屋根が重い上、斜めに木をいれるスジカイがしてなくて倒壊したと聞きましたが、日頃からそういう対策をして置くのはいいと思います」

結論としては、現在、年月日時を指定するような地震予知はできないということ。予知する人がいたら、教祖であれ学者であれウソだということ。私たちとしては、家庭と地域の防災対策の質を高めながら生きていくことだけが、明日か百年後か千年後かわからない地震とのつきあいかただということ。

オウムのせいで忘れた感のある神戸や、隣国のサハリンを直視して、自分にできる手助けをしながら、学ぶべきを学ぶ。それしかないようだ。

紀平てい子さん

鈴木 由美子

国会の野次には品がない。故障したエレベーターに女性閣僚が閉じ込められ開会が遅れたとき、男性議員は「女は化粧が長いからな」「トイレじゃないのか」「これだから女は困るんだよな」と騒ぎたてた。

無所属議員である紀平てい子さんの席は中央に近く、いつも与野党両側の罵声にはさまれる。派手にどなっていた保守の議員が紀平さんの顔をチラッとみて、「これ以上やると紀平さんに叱られるからやめよかな」と口をつぐんだことがあった。政治的にはタカ派の議員も、紀平さんの前では教師にらまれた子どものように遠慮する。

「きっと私は、市川房枝先生の光背を背負っているからでしょう」と紀平さんは言う。あの市川房枝氏の第一弟子であり、政治浄化と理想選挙の推進者。国会議員としてはまだ一期目だが、それ以前に四〇余年に及ぶ活動歴がある。

若い世代は佐川急便事件やリクルート、ロッキードあたりしか知らないが、紀平さんは四八年の昭電疑獄以来、戦後のあらゆる疑惑事件と四つに組んで闘ってきた。売春禁止法制定運動や四大公害訴訟にもかかわった。また師事した市川房枝氏を通じて、戦前の婦人参政権獲得運動の思想が体内に息づいている。

紀平さんによれば、婦人参政権獲得期成同盟会がめざしたものは、まず差別を撤廃し男女平等の実現、富を公平に配分する福祉の向上、政治の浄化、そして世界の平和の達成。これらのすべては、のちの日本国憲法や女性差別撤廃条約の先取りであったという。

市民運動家としての長いあゆみを経て自らが国会に出る際も「理想選挙」を貫いた。「出たい人より出したい人を」の精神にもとづき、紀平さんを推薦する人々が自発的な拠出金を持ち寄って手弁当で運動、選挙費用の収支を公開した。祖父や父親の出身地熊本で、八六年には次点、八九年にはトップ当選。保守色の強い土地で、画期的な勝利であった。

紀平さんは、参議院というものは政党の論理に呑み込まれない「理」と「智」の府であるべきだと考えている。参議院議員はすべての議決に是々非々の思想であたること。政党に属する議員も、党の拘束から解放されて個々の考えで審議や票決に参加すること。それが参議院を生かし二院制を機能させる道だという思いがある。

確固たる考えを持って国会に入った紀平さんのまわりで、政党や政治家は、ひょいひょいと正反対の側に移る変わり身の早さをみせた。九三年に細川政権が発足したら、ずっと小選挙区制に反対してきた社会党が与党として賛成に回るありさま。

紀平さんは、提案された小選挙区比例代表並立制は、死票が多く出る上、小政党・女性・新人を締め出すものだという批判的見解を変えることができなかった。新しい政治資金規制法が、企業や団体の政治献金を温存した骨抜き法であることも見逃せなかった。

これら政治改革諸法案の審議中、幾人もの政治家が紀平さんの部屋へ説得に訪れた。羽田孜氏をはじめ現在の新進党のメンバーが多かったが、彼らの態度は丁重だった。裏取引や利益誘導によって意見を変える人ではないことが知れ渡っているからだ。自民党は体質が違いすぎると思ってか姿を見せない。方針の大変換をした社会党も、敷居が高いのか紀平さんの部屋には現れなかった。紀平さんを訪問する顔ぶれが、昨今の政党の現実を物語るかのようだ。

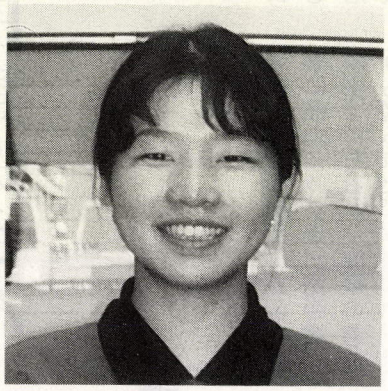
大きな会派に属していないと、国会での発言の機会や持ち時間に規制を受けるのが現実。紀平さんは制約をかいくぐって、いじめに対応する行政側の体制づくりに力を尽くし、持ち込まれる市民の請願一つ一つをおろそかにせず提出してきた。

手刷りの議会報告では、自分の活躍の宣伝よりも、国会全体が今どうなっているかを解説する記事に重点を置いている。日本の政治全般に見通しがきく有権者を育てていくという、政治教育の意味を重んじているからだ。

無所属で一人一党という立場の紀平さんには、群れとして動く国会で、不思議な存在感がある。与野党離合集散の嵐の中で見失われた、政治的信念の体現者として、まっすぐな歩みを続けている。

紀平てい子（参議院議員）一九二八年福岡県生まれ。聖心女子大在学中に結婚、市川房枝秘書、日本婦人有権者同盟会長などを経て八九年熊本選挙区から参議院に初当選。法務委員会所属。

小枝すみ子さん



皇居と国会議事堂と警視庁のある千代田区にも、日常生活を営む普通の住民がいる。昼間人口は一三〇万人、夜間人口わずか三～四万人。特異な街であるだけに、区民の抱える問題は複雑である。

小枝すみ子さんは、千代田区議会に二〇代半ばの若さでひょっこり当選、今は二期目に入ったところ。

千代田区役所の新入職員だった小枝さんは、社会教育部門に配属され、ビルの谷間で子育てする若い母親たちの学習活動の世話をしていた。その講座参加者の一人が社会党の女性候補募集に応募して、区議会選挙に出ることになった。ところが、お母さん候補として新聞報道されたあとになって夫に猛反対され、土壇場で降りると言い出した。

小枝さんは彼女に翻意をすすめた。夫の反対なんかでやめちゃったら「女の名折れ」じゃないの、離婚しても出馬しなさいよ。あれこれ議論するうちに、それなら小枝さん自身が出たら、ということになった。小枝さんは当時区内の職員住宅に入居していたから、被選挙権がある。他人に対して離婚してでもやれと迫った以上、自分に向かって退職して出ろと言われても反論しようがない。そのうち結婚、出産して共働きママになるはずだった人生設計が急転換してしまった。

区議会に出た小枝さんはまず、下っ端職員時代なら話もできなかった区長に、区役所内のお茶くみ廃止について質問。お茶くみで女子職員がやりかけの仕事を中断させられる大きな無駄をなくし、行政の足元からの男女平等をと訴えた。

議員として区内の人々と接するにつれ、自分が会派に入っている社会党と、市民の感覚との差が見えてくる。一番大きなズレは、九〇年代の千代田区を揺るがしている〝コーテキハイ〟（公共施設適正配置構想）にあった。

小学校一四校を八校に、中学五校を三校に統合して高層化し、公共住宅や文化福祉施設と同居させる構想。目標としては区の人口の増加をうたいながら、ここで暮らす人々の願いとは無関係な土建屋的発想で、ハコモノ作りが先行している感があった。

たとえば区当局は立派な博物館をつくろうとする。ところが小枝さんが接する区民は銭湯不足によりタクシーでお風呂に行く生活に疲れ、公衆浴場の設置を望んでいる。

小枝さんは九三年に、自腹を切ってアメリカの都市開発を学ぶツアーに参加する。千代田区と同じく一極集中の悩みを抱えたロサンゼルス市は、無制限な開発の結果、多数の高層ビルが空き室だらけになって都心の荒廃を招いていた。社会党も含めた諸政党が賛成しているコーテキハイ構想を実施したら、千代田区の未来もこうなる。

一方、条件の似たサンフランシスコ市では、市民の低成長運動が力を持ち、投機的な開発を最小限にとどめ、都市環境や市民生活を守りつづけていた。千代田区でも、これをめざすべきではないか。アメリカで良い例と悪い例を見てきた小枝さんは、街づくりに本腰をいれはじめる。

子どもの数が少ないから一時期学校数を減らすのはやむを得ないとしても、空いた学校をブルトーザーで壊して高層ビルを建てるのは中止させたい。そのまま生活に役立つ施設として使いつづけ、人口が増えたあかつきに学校として復活させればいい。サンフランシスコでは、当然のようにそれが実行されていた。

街をコンクリートの高層ビルで埋めつくして容量オーバーにしてしまったら、交通もゴミ処理もパンクし、市民の心身の健康が損なわれる。

市民の立場で区政に取り組むため、小枝さんは社会党の会派を出た。毎週土曜に喫茶店でミニ集会を開き、市民の話を徹底的に聞いた。

九五年の統一選挙では無所属として出馬し当選、コーテキハイ問題を真剣に考えている無所属新人たちと一緒に「明日の千代田を拓く会」という新しい会派をつくった。

仲間は、区内の老舗の旦那さんたち。国政レベルでの考えは色とりどりだけれど、人間が暮らす千代田区の街づくりという思いを共有している。開発に適度な規制を加え、環境を守る街づくりのための条例案を、今練りあげようとしているところだ。

小枝すみ子（東京都千代田区議会議員）一九六三年生まれ、明治大学卒。千代田区役所職員を経て、九一年区議会に初当選、九五年再選。大規模開発特別委員会、防災特別委員会等に所属。

二九歳の女性区議誕生

若さが変える地方議会

和田真保さん

佐藤ゆかり

政治はわからない、自分には関係ない、だれがやってもおなじ……。若い世代に政治無関心派が多いと嘆かれて久しいが、それでもここ二〜三年、政治に目を向ける人が少しずつ増えているように思う。たとえ、それが政界で繰り広げられる様々な茶番劇をワイドショー感覚でとらえているだけだとしても。

そんな二、三〇代の有権者が「今までのような政治家を知事にはしたくない」と選挙会場まで足を運び、本当の改革へのわずかな望みを一票に託す。結果、東京都知事に無所属の青島幸男氏、大阪府知事に横山ノック氏が初当選。多少ではあるが、知事の若返りも図られた。

最も地域の生活に密着している「区議選」もまたしかり。区長選は政党相乗りの現職区長が強かったが、区議には無所属派と多くの若手が当選を果たしている。

練馬区に二九歳の女性議員誕生

二九歳の和田真保さんもそのひとりだ。

政界にコネがあるわけでも、政治経験があるわけでもない。

選挙にはつきものと言われるカバンもない。政界とは無縁な家庭に育った、普通のOLが奮闘。「無理にすすめてもしょうがない」と選挙カーからがなりたてることもなく、「ひらめく　きらめく　ねりまく」をスローガンに、生活に密着した公約を訴える。その等身大の姿とシンプルな選挙活動に有権者が共感、無名の新人ながら練馬区始まって以来の七一三六票を獲得。なみいる現職議員を押さえ、議員五二名中（女性一二名）、トップ当選の快挙をなし遂げた。

一七三センチの長身と、どこにそんなバイタリティが、と思わせるスリムな体型。商社広報部で社内テレビのキャスターを勤めていたキャリアウーマンはミニスカートをひるがえし、言いたいことを歯切れよく話す。

そんな現代的な彼女が何を考え、どう地域を変えようとしているのか？

娘に影響を与えた、行動派の両親

両親は揃って学者であり、市民運動家。その点で真保さんを「ふつうのOL」といっては少し違うかも知れない。選挙出馬のきっかけとなったのは、やはり母親の力が大きかった。

和田あき子さん（五六歳）は大学でロシア語を教えるかたわら、社会運動を長年にわたり続けてきた行動派。最初の運動は早稲田大学四年の時、授業も受けずにデモに参加していた六〇年安保とか。

時代の申し子はその後、大学院に進み、一九六四年にロシア史を研究していた春樹氏と結婚。近くに米軍の朝霞基地がある練馬区の大泉学園に移り住んだ。

時は折しも、ベトナム戦争真っ最中。戦火は翌年の六五年に様々な名目で激化。終結どころか、ベトナムは殺戮の場となり続け、犠牲者は日を追うごとに増えるばかり。平和を掲げる日本の基地内の野戦病院にも多くの戦争犠牲者が治療を余儀なくされている。

病院内のアメリカ兵負傷者に、最初に反戦を訴えたのは学生運動の経験がない夫のほうだったとか。二人は「朝霞反戦放送局」を旗揚げ、毎週日曜日の朝に反戦を訴え続けた。

その後、運動は「大泉市民のつどい」と名を変え、二人の呼びかけに牧師、友人、地元の高校生、と輪が広がる。当時真保さんは五歳。本人はほとんど覚えていないが、両親に手を引かれ、反戦運動に

参加（？）していたようだ。

あき子さんはそれからも実に活動的だ。PTA活動、ゴミ問題、有吉佐和子の「複合汚染」を読んで触発された食べ物の危険……。

なかでも、「食」への意識は徹底している。「安心できる食生活」を望むあき子さんは「安全な食べ物を作って食べる会」を発足、千葉県三芳村の農家に協力を求め、無農薬野菜の流通にも乗り出した。ここまではよくある話だが、彼女は購入だけでなく、自らも農家を訪ねて野菜作りに参加している。まさに、実行を心掛けるあき子さんらしい運動の方法であり、何事にも有言実行を貫くその姿勢は、行動の大切さを子供に教える手本となっていたはずだ。

だけど、個々の力だけでは何も変わらない

そんなあき子さんを震撼させる事故が起きた。八六年のチェルノブイリ原発事故は〝ロシア〟を研究していた彼女にとって、余りにも痛い経験だったと言う。

「あの美しい大地が汚されたことへの怒りはもちろんですが、農民が一生懸命作った大地に放射能がばらまかれ、多くの人間が傷ついた。あってはならない事故に大きなショックを覚えました。

そして、思いましたね。原発や環境を守るのは、もう個々の力では無理だ。地域が、国が変わらなければ、色々な問題をくい止めることはできない、と」

仕事と市民運動を続けながら、区議会をはじめ、政治に強い関心を寄せるあき子さんは、だが、政治に関心を寄せれば寄せるほど、目につくのは市民感覚とはかけ離れた箱物行政。庁舎はえらく立派なのに、地域社会への還元は実におそまつ。聞こえてくるのは談合などの黒い噂ばかり。そのうえ、区議会には一番日常生活と密着しているはずの女性や、これからの時代を担う若い世代がいない。

いや、区議会だけではない。リサイクル運動も市民運動も、頑張っているのは年配のお母さんたちばかりだ。

「このままではいけない、と思いました。若い人や女性が政治に参加するようにならなければ何も変わらない。若い人が若い人にメッセージを発しなければいけないんですよ」

それでは、と若い（特に女性）人材を捜し始めたあき子さん。ところが、いざ見渡してみると、なかなか〝これ〟という人が見つからない。返ってくるのは「区議会なんてダサイー」「おじさんたちとはやってられない」など、冷やかな反応ばかり。

考えあぐねていたある日、あき子さんが唐突に思い付いたのは……。

「そうだ！うちの娘がいた！」

大学で日本の台湾侵略を勉強していた娘は、親が言うのもなんだが自立心旺盛で芯が強い。学生時代からテレビキャスターのアルバイトをするなど、行動派でもある。研究をやめて会社勤めを続けていることは気に入らないが（企業は政治や市民問題などへの意識が低い、経済優先組織と思っていた）、社会人としての普通の感覚も身に付けている……。

活動派の人間がいったん〝こう〟と決めると、その後の行動は早い。正月早々、真保さんに区議選出馬の勧めを説いた。しかし、仕事が面白いうえ、政治に興味のない私がどうして、と本人は浮かぬ顔。その時はサラリと聞き流されてしまったとか……。

今、自分が何かをしなければ

そんな政治無縁派の真保さんの心を動かしたのが、「阪神大震災」だったと言う。

「震災はその後の三つの災害が状況悪化を招いた、と言われています。正しい情報が地域に届かなかった『情報災害』、地域に災害に対する準備がなかった『地域災害』、すべての対応が後手に回った『官僚災害』です。あの震災で地域の防災体制の遅れを痛感、これではいけない、と思いました。

そして、現地で働くボランティアの人たちをテレビで見て、自分も何かをしなければならない、地域に密着した、今までとは違うことをやらなければ、と考えたんです」

真保さんが勤めていたのは「三菱商事」という大組織。知らない部署と部署、関連会社を情報で繋いで社員同士に血の通ったコミュニケーショ

ンを図る、広報部での仕事だった。その経験が、地域のきめ細やかな情報化に役立つのではないか？

さらに改めて地域に目を向けてみると〝福祉問題〟など、課題が山積みなことに気がついた。〝痛勤問題〟や

問題改善に取り組むには区議になるのが一番の近道、OLでいるより人もついてくる。真保さんの話はいつも単純明快だ。

もちろん、「だれかがではなく自分が」の娘の姿勢に母・あき子さんは大賛成。父・春樹さんの「若い世代の声を代表するような議員に」の言葉にも頷き、出馬を決意した。選挙二ヵ月前のことである。

この後の行動がいかにも現代っ子らしい。OLから議員への大きな転身をまるで普通の転職のようにサラリと受け止め、「選挙だから」と気負うこともなく、しばらく会社勤めと送別会巡り（？）を続けている。自分の都合で会社や同僚に迷惑はかけられない。そう考えたであろう彼女は、出馬表明から一ヵ月以上もあとの三月末に円満退社をした。

勝利の秘訣はチームワーク

そして、選挙運動……。約一ヵ月の手作り選挙は、地域の人たちや若い世代の熱い思いを知る選挙でもあったようだ。

あき子さんとともに政治に関心を持ち、市民運動を続けていた人たちのほかにも、政治の話などしたこともない真保さんの友人、知人が応援に駆けつけ、支援要請に回ってくれた。出勤前に一緒に駅に立ってくれる人もあり、選挙事務所を訪れた元同僚は延べ三〇人にもなったとか。そのすべての力が結集し、彼女を議員へと押し上げた。

「娘の選挙運動は公約を載せたリーフレットと選挙公報、ハガキを配付しただけなんですよ。車は一週間だけしか回しませんでした。後は、人が人を呼んでくれました。

その人脈も蓋を開けたら、市民運動を続けていた私よりも娘のほうが多くて（笑）。政治に無関心と言われる若い世代も何かきっかけがあれば乗ってくれるんだ、とつくづく思いましたね」

真保さんがあき子さんの言葉を続ける。「企業も政治の力を見直し始めたのではないでしょうか？　政治が良くならなければ経済も良くならない、とサラリーマンは知っていますよ」

政治があって経済がある。政治のよしあしで環境が変わる。そして、経済と環境が良くなければ暮らしやすい日本にはならない。結局、すべてのもとは政治なのだ。そのことを彼女をきっかけに若い世代が強く認識する。それだけでも、確かに真保さんの選挙運動は意味があったと言えるだろう。

地域にきめ細やかな情報を

しかし、彼女は議員になった。新人類の出馬が若い世代の目を政治にむけさせただの、二九歳の政党なし女性の当選が議会に一石を投じただの……、それがどんなに意味のあることだとしても、ただそれだけでは区議の仕事を終えたことにはならない。

「今までの縦割り行政」に大きな疑問を持ち、「既存の区議像打破」を試み、「一年間は見極める期間」と政党所属を拒む。それを公言する真保さんだからこそ、住民の目に見える形で地域に貢献しなければ、だれも彼女を認めようとはしないはずだ。

「四年間は戦いになると思う」

あっけらかんとした現代っ子が口許を引き締めた。そして、その貢献の具体的な形が公約の実現なのだ、と言う。

なかでも、彼女が一番力を注いでいるのは、阪神大震災で必要性を感じた「地域の情報化」だ。これはOL時代に培った情報の収拾と伝達のノウハウを駆使し、防災情報など、新しく正しい情報を絶えず流していこうとするもの。その積み重ねが災害時の混乱を防ぎ、より安全な方向に住民を導く手だてとなるはずだから。

また、地域の情報化は住民同士のコミュニケーションと、住民の生の声を行政に反映させる大きな役割も担うことになる、と考えている。

方法がまた新しい。全国で二二三万人（一九九四年末）が加入している「パソコン通信」でネットワークを組み、新情報を即座に伝達。高年齢層が集まる団体の通信加入も多いことから、そちらともネットワークをつなぎ、今までとは違った視点からの福祉充実に役立てようとしている。加入者以外には内容をファックスと郵便で送付、これですべての人に必要な情報が届くというわけだ。

もう一つの方法が新聞だ。区の新聞と地域の新聞を作成し、地域に密着した情報の伝達と意見の受け入れに使いたいと意欲を語る。もちろん、どちらも読んでもらえる面白いものを、の条件を自分に課している。

ほかにも、

○新しいバスルートの確保
○大泉学園再開発に伴い、駅に官公庁の出張所をつくる訴えを
○窓口を一本化した防災見直し
○議会で議案をチェック、行政と市民感覚のズレを正していくこと、などなど。

夢物語ではない彼女の公約は、一見地味なようにも感じられる。だが、新しいバスルートは、日々〝痛勤〟を繰り返している会社員であれば、だれもが望んでいること。また庁舎が自宅から遠く離れているがゆえに、有給休暇を使って必要な手続きを行うしかない社会人がいることも事実だ。普通の地元市民だからこそ問題、と感じるそんな視点の的確さと、結果がすぐに出る約束を掲げる若さと心意気。これこそが、今、区議会に求められている新しい力なのではないだろうか？

もちろん、彼女の責任感に期待するだけではことは進まない。真保さんは市民の努力、協力も望む。地域を作っていくのは一人ひとりの力なのだから、と。

住民の力を望む真保さんが一番大切に考えているのも、やはり地域での人間関係だ。「地域の人や区職員とより良い人間関係をつくっていきたいですね。これは企業でも地域でも同じですよね。人間関係を培ってきた企業での経験を生かして地域と連携を保ちながら、一緒に住みよい練馬区を実現させていきたいと思っています。一人会派でも地域の代表である以上、私は一人ではないですから」

そんな彼女を、一票を投じた有権者は温かく見守り、若い彼女の出現に戸惑う人たちは厳しい目で見続けるだろう。

開かれた区議会の先駆者に

だが、だれよりも厳しい目で彼女に期待を寄せているのは、母であるあき子さんにちがいない。

あき子さんはもう一つ、大きな要望を出した。それは、議員のままで出産をし、子供を育てること。そうすれば、産休の問題など、より幅の広い、時代にマッチした制度をつくる活動ができるはず、と考えている。

「未婚でも何でもいいのよ（笑）。色々な世代、職業、環境の人たちが集まる。だからこそ、色々な視点からの審議ができるんじゃない。そういう開かれた区議会が今、何よりも必要なんじゃないの」

論客のあき子さんの言葉は今の政治の方向性をはっきりと現しているように思う。生き方が多様化する時代になればなるほど、政治も時代に合った方向付けが必要となる。そうした色々な変化に気づき、それを審議していく「自分たちの区議会」が必要なのだ。

それにしても、「未婚でも何でもいいから」と言う母と、「公約の実現よりも、この方が難しそう」と笑う娘。

選挙という大仕事をなし遂げ、これからが正念場と気を引き締めながら、あくまでも明るく、ノリが軽い。そんな新人類区議を見ていると、〝難しい政治〟〝特別な政治家〟が妙に身近なものに感じてくる。

「世代交代」というにはまだ早そうだが、政界への新しい風は、確かに吹きはじめているようだ。

読むBOOK!?

堂本　暁子　著

立ち上がる地球市民

NGOと政治をつなぐ

田中喜美子

世界第二位のGDPを持ちながら、女性の政界進出が不思議なほど遅れている、私たちの国日本。

これではならじとここ数年、行政サイドでも政策策定の場への「男女共同参画」の旗印をかかげはじめた。

しかしそもそも男の権力闘争の場である国会に女性が加わっても、結局は陣笠か、人寄せパンダにおわるのでは、と悲観的な人は数多い。

いや違う、女でも、というより女だからこそ、男の「勝負の世界」とは異質の原理で勝負することができるのだ、ということをわからせてくれる本が現れた。

著者はもとTBSテレビの名物ディレクター、六年前土井さんに請われて参議院に出馬した堂本暁子。ベビーホテルの取材で賞を受けたすばらしい作品を、まだ記憶している人も多いだろう。

不思議なことに、はたけ違いの政界で六年近くを過ごした著者は「不愉快なこともさしてない」し、「自分らしくのびのび仕事をしている」とこの本の冒頭でいう。

ほんとうだろうか――と首をひねりたくなるのだが、読み進むにしたがってその謎が解けてくる。

著者が「のびのび」仕事ができたのは、いわゆる「永田町の論理」とはまったく無縁なところで勝負してきたからなのである。

日本人には耳慣れないNGOという言葉がある。

NON GOVERNMENT ORGANIZATION－直訳すれば「非政府組織」ということだが、つまり利益を目標とせず、志を同じくする人々があつまって活動する市民運動団体のこと。

議員となった著者が、政争の埒外で充実した活動をくりひろげられたのは、彼女自身議員になる前にNGOとしての活動の基盤があり、政治家になってからの活動がNGOと結びついたかたちで行われてきたからである。

欧米諸国では、NGOはすでに政治の一部を担っている。

例えば国連の主催する国際会議には、NGOから大勢の人が参加している。しかし日本では、参加する数が少ないばかりでなく、一九九四年まで、日本政府派遣の代表団のなかにはNGOの代表者が入っていなかった。日本の政府にとってNGOはなきに等しかったのだ。

それ故九四年のカイロの「国際人口・開発会議」に、はじめてNGOの一つ「女と健康ネットーク」の代表としてお茶の水大学教授の原ひろ子さんが出席したのは、市民運動の存在が政治の場で認められたという点で、実に画期的な出来事であった。

そのかげにあったのはもちろん著者の力である。

女たちの組織が、国会の外でどんなふうに動き、議員である著者がそれを政界の世界にどんなふうにつないでいったか……その動きは第三章にくわしく語られている。

カイロ会議以降、もっぱら男たちの人口政策の視点でのみとらえられていた人口問題が、女性の視点から「性と生殖に関する健康」の問題としてとらえ返され、女たちの主体性を尊重する「リプロダクティブ・ヘルス」の理念が浸透しつつある。

人口問題ばかりでなく、環境問題、生物多様性の保全の問題と、著者の政治家としての活動は幅広いが、それらのほとんどは、国会外のNGOとの連携のなかからうまれている。

市民の声を国際的・国内的な政治の場につなげるキーパソンとしての「政治家」の存在の重要性に、この作品は私たちの目を開かせてくれる。日本にもようやく「市民の時代」の幕あけがやってきたのではないだろうか。

全体は四つの章にわかれ、子どもの福祉の問題、環境と生物多様性の保全の問題、人口移動の問題と、著者の活動範囲のひろさを表しているが、ゴーストライターの手になる政治家たちの類書にはない肉声が伝わってくる。

NGOと政治をつなぐ――この言葉の意味がほんとうに理解されるとき、日本の政治ははるかによきものになるのではないだろうか。政治を「政治屋」の手から取り戻したい、と考えている人々に、ぜひ読んでほしい一冊である。

（河出書房新社　一五〇〇円）

包装法の素顔

酒井浩江

「事業者に引き取り義務」のインパクト

一九九四年九月一五日、朝日新聞は一面トップで、「資源ゴミの分別収集と再生利用を進めるため、厚生省が清涼飲料水メーカーやスーパーなどの業界にビンや缶、プラスティック容器などの引き取り義務を課す法案づくりを急いでいる。次期通常国会に提出、成立をめざしている」と六段抜きの大見出しで報道した。

「へぇー。日本でもついに事業者に引き取り義務を課し、ゴミを生産段階から減らそうというスタンスになったのか」と感慨深いものがあった。

それというのも、それまでの日本の法律のもとでは、ゴミは減らすことも資源化することもできないという状況にあったし、他方ドイツやフランスでは、包装廃棄物の回収再生システムがすでにスタートしていたからである。

そこへ入ってきたこのニュース。ことのほか新鮮に思えたのは無理もない。

しかしこの新鮮さは、記事のもとになった原典を検証していくにつれ泡のように消えてしまった。そのかわりに、うんかのごとく湧き出てきた疑問を抱えながら法案の動きにつれて動きまわり、考えつくした結果、厚生省がマスコミを通じて大宣伝しているこの法案に対して市民の立場からノーの結論を出すに至り、今年の三月八日、厚生省・通産省に対し、

「実質審議がない段階での今国会上程は時期尚早、留保されたし」の要請書を提出したのである。

マスコミも、他の市民団体もこの法案を評価し、好意的に受け止めているなかで、法案の仕切り直しを求め、国民的論議にかけることを訴えるのは、まさにルビコン河をわたるほどの勇気を要する決断だった。

しかし残念ながら政府与党の動きが活発で、ついに閣議決定、今国会で成立してしまった。

「廃棄物二法」の問題点

なぜ私たちはこの法律に対してこれほど執拗に異論を唱えつづけるのか。それを理解していただくために、まず現在のゴミ処理制度の基になっている廃棄物法について説明したいと思う。

廃棄物関係の法律には、通称「廃棄物二法」と呼ばれる「廃棄物の処理および清掃に関する法律」と「再資源利用促進法」の二つがある。前者は一九九一年に大幅に改正されたもので、後者は同じ年に新しく制定されたもの。一般に新廃掃法とリサイクル法と呼ばれている。

まず新廃掃法であるが、厚生省が二〇年ぶりにこの法律の改正に着手した主なねらいは、それまで廃棄物、つまりゴミをいかに衛生的に処理するか、というところに重点が置かれていたのを、ゴミの発生そのものを抑制し、さらに再生利用を推進してゴミの減量化をはかる、というところにあった。

具体的にいうと、①国民は廃棄物の排出を抑制し、国や自治体の施策に協力すること、②事業者は事業活動に伴って生じた廃棄物の再生利用を行い、製品、容器等が廃棄物となった場合、適正処理が困難とならないようにすること、③国・地方公共団体は一般廃棄物の減量に関し、住民の自主的な活動の促進をはかり、処理に関する事業としての施設整備をおこなう、という三つの責務を打ち立てようとし

たのである。

ところが産業界のモーレツな抵抗にあって、事業者の責務があいまいなものとなってしまった。例えば厚生省原案にあった適正処理困難物に関する条文「消費者を経由して適正処理が困難な廃棄物となった場合は、その回収を行わなければならない」の条文もののみごとに削除されてしまった。

つまりスーパーでのトレー、ペットボトル、ビンや缶などを「消費者を経由して適正処理が困難となった廃棄物」として指定しようとしたのだが、事業者によるそれらの引き取り義務は姿を消した。

また一般廃棄物で急増しているものは、事業所から排出される紙ゴミなどである。家庭から出されるゴミは減少傾向にあるというのに、骨抜きにされた法律のもと、紙ゴミの排出は一向に減っていない。

こうしてゴミ急増の原因である事業系ゴミの減量方策は無力化し、国や自治体は、増えていない家庭ゴミを対象に、ゴミの減量という錦のみ旗のもと、指定袋を市民に買わせるというかたちの有料化を行い、税金の二重取りを行っている。

一方この改正法とともにスタートしたリサイクル法はどうであろうか。この法律は、産業界のことには口を出すなといわんばかりに、通産省が厚生省を牽制するために作られたという側面を持つ。

その要旨は、①再生資源の原材料としての利用を促進するために特定業種を指定する（紙、ガラス、建設など）②第一種指定製品を指定する（自動車や電化製品）③表示により分別しやすくするために、第二種指定製品を指定する（スチール、アルミ缶、ペットボトルなど）④指定副産物を指定する（スラグ、土砂など）というものである。そして主務大臣が事業者に対して指導・命令を行うことができるとされている。

しかしながら（またしてもしかし、なのだ）、この法律には大いなる問題点がある。肝心の指定がきわめて少ない。例えば①に鉄鋼業が含まれていないために、③にスチール缶を指定しても、結果としてくず鉄価格が暴落するという事態となる。つまり、市民がせっかくスチール缶を分別し、自治体がそれを資源化しようとしても、鉄鋼業がそれを引きとるしくみになっていないために、スチール缶は結局ゴミとなってしまうからである。

さらに決定的な欠陥は、同法には再使用の視点がないことである。

ゴミを減量しようと思えば、現在の大量消費、大量廃棄型の社会経済活動にメスを入れ、①廃棄物となるものの発生そのものを抑制する②再使用する（REUSE）③再利用する（RECYCLE）④廃棄するものについては適性処理をするという四つのステップを踏まなければならないのが大原則である。

ところが、③のみを対象とする同法は、発生源でゴミのもとになる物質の生産を抑制する視点がないために、社会経済が大量リサイクル型になるだけでかえって環境への負荷を高めてしまうのである。

ゴミをもとから絶たない新法

ことほどさように問題のある廃棄物二法がスタートして三年が経ち、生まれたのが現在の包装廃棄物新法であった。

冒頭で述べたように大きな期待を持ったのは当然のこと。

しかし今度の新法も、発生源に手をつけるものではなく、やはり第③ステップからスタートするものに過ぎなかった。

法案のもとになった厚生省生活環境審議会の報告書を読めば一目瞭然。ゴミ急増の最大の原因である事業系廃棄物（オフィスなどから廃棄される紙くずなど）の処理責任を自治体から事業者に移し、その回収や処理コストの負担を事業者に求める責任を放棄している。資源循環型の「ゴミゼロ社会」の実現などという耳あたりのいい言葉がちりばめられているものの、その実態は大量生産、大量消費、大量廃棄の実態を承認した上で、家庭ゴミのなかに占める割合の大きいビン、缶、ペットボトルなどの容器、包装廃棄物の分別収集や再生利用の促進を進めましょうよということに過ぎないのだ。

その程度のことであれば、現在の廃棄物二法の手なおしで十分対応できるはずと思われるのだが、なぜか新法であり、しかも包装廃棄物の引き取り、再生利用を行うシステムを創設するに当たっては、第三者機関（つまりは指定法人）をつくり、その費用を製造・販売事業者に支払わせるというのである。

この第三者機関構想はドイツ・フランスで相次いで確立された包装材再生利用システムに触発されたものであろう。両者の違いは回収費の負担者で、ドイツでは第三者機関が負担するのに対し、フランスでは自治体が負担する。ただし分別収集する自治体にはEから直接支援があり、包装素材メーカーが自治体から買い取る際の最低価格を保証している。これに対し日本のそれは、フランス方式と喧伝されながらも、直接支援も最低価格保証もない、似て非なるものである。事業者負担も、容器や包装材を使うメーカーやそれを販売する業界のみで、それらの材料をつくる素材メーカーには何の義務も課されない。

消費者の負担が増大

これは大変、この法律は事業者に義務を課すといいながら、実は自治体に過大な負担を負わすことになる。つまりは市民の負担だ。しかも経済的インセンティブのかけかたが、川上の素材メーカーを対象としていない、というトンチンカンなものだから、われわれ消費者が望むワンウエー容器の縮小、再使用容器の増大にはつながらない。むしろこの法律が免罪符となってワンウエー容器が増大し、消費者は、上乗せされて高くなった製品を買うしかない、という事態も考えられる。

さらに報告書は、消費者は排出量に応じた処理費用を負担することを提案しているので、市民は分別に協力した結

果、高くなった製品を買い、税金はこれまで同様支払うほか、さらに処理費用を二重に支払うという「二重義務」を課せられるということになりかねない。

「事業者にそれなりの義務を負わせている」ということをかくれみのにして、自治体、つまりは市民に負担を求める法律だ、との認識から、私たちは拙速な法成立に待ったをかけるための運動を精力的に行ってきた。

法成立後の取り組みへ

厚生省との折衝、批判書の提出、法案の上程留保を求める要請書の提出、関係省庁やメーカーへも参加を呼びかけたフォーラムの開催と、私たちは目のまわるような忙しさを味わった。

一方、マスコミの論調は最後の最後まで、「画期的な法案」とのみかたを変えなかった。また大方の市民団体や国会関係者も、「一歩前進」の立場から、早期成立に向け動く、という総動員体制が展開された。

かくして法案が閣議決定、成立へと急進展してしまったいま、私たちは「新法で果たしてリサイクルは進むか」というフォーラム第二弾を企画、その実施に向けて準備中である。

最後にこの新法を追いかけてよくわかったことを三つあげておきたい。

①社会党という党の体質。

村山政権の維持ということが最大のキーワードで、与党イコール官僚のイエスマン化している。

②マスコミの脆弱化

官僚のレクを鵜呑みにし、記者クラブは個人リークに抗議もせず、喜んで書かされてミスリードする。（例えば四月二八日づけの朝日の「素材メーカーに再生利用義務」の見出しなど完全に誤報）。

③市民運動の想像力欠如。

行政側の打ち出してくるしたたかな戦略に対して無防備すぎる。過去を検証しながら未来を思考する想像力で主張を明確化する必要を痛感。

ゴミから見えてきた政治や行政との格闘はまだまだ続きそうだ。

（「ゴミ危機回避への道を探る市民フォーラム」実行委員会世話人）

「包装ごみ法案」廃案か

関係省庁の担当者も出席して開かれた市民団体の集会では、法案に厳しい意見が相次いだ＝14日、東京・永田町の参院議員会館で

厚生 通産 連合に 農水 反発 出番うかがう 環境

時時刻刻

厚生、通産両省が、今国会への提出を目指しているびん、缶など包装廃棄物のごみ法案が、農水省の反対で立ち往生している。当初は、十八日の閣議で正式に政府案として合意する予定だったが、調整がつかず、事実上間に合わなくなった。今国会へ提出するためには、遅くても二十八日の閣議で結着しなければならず、これを過ぎると法案は日の目をみない、ことになる。役所間の綱張り争いにうんざりする市民団体の間でも、「この際、早期成立を目指すべきだ」「両省案のままでは不十分」と意見が分かれている。

「十八日の閣議には間に合わない」。十三日午後、厚生、通産、農水の各省の担当局長らが、藤井威内閣内政審議室長を訪ね、こう報告した。

「十八日がだめなら連休前に調整をつけて、今国会に間に合わせるように」と藤井室長が指示したのに対し、農水省食品流通局の鈴木久司局長が「業界に義務を課す制度なので、期限を切られても困る」と発言。

藤井室長は「これは官邸の意思だ。何を考えている」と厳しい調子で声を張り上げた。

厚生省が昨年九月に、業者出資の第三者機関を設置し、包装廃棄物のごみ引き取り義務を課す新制度を打ち出してから、関係各省を巻き込んだ権益争いが繰り広げられてきた。

通産省は当初、包装廃棄物の範囲をびん、缶、ペットボトルなどに限定した対抗案を作成、「すべての包装廃棄物を含むべきだ」と主張する厚生省と激しく対立した。

「話が違うぞ」

その後、業者の一部が厚生省案を受け入れる意向を示し、橋本龍太郎通産相も「早急に進めるように」と指示したため、今年に入って合意にこぎつけた。

しかし、その合意内容は農水省が所管する食品、飲料会社など、包装容器を使う中身メーカーに限って、包装廃棄物の取引義務と再利用の費用負担を課すもので、通産省が所管するびん

省庁綱張り争い もめる国会提出

や缶の容器メーカーは含まれていない。

「これでは不公平」と反発を強めた農水省は三度にわたって膨大な質問をファクスで厚生省に送ったほか、異例ともいえる法案の大綱を作成し、国会議員に根回しを始めた。

この大綱は、引き取り義務をメーカーではなく、従来通り農水省が所管する食品流通業界に義務を課すもの。これを一部取り入れ、容器メーカーも一部負担することができるようにした代案を非公式に示したが、農水省は公式に示したが、農水省は

「それでも不十分」と音を縦に振らない。

今度は、通産省が「容器メーカーも含める代案は合意内容と違う」と反発し、動きが取れない状況になっている。

業界大物の影

農水省が反対を唱えるもう一つの要因は、食品業界団体が会員に名を連ねる食品産業センターが、法案に反対を唱えているからだ。

同センターの森実孝郎理事長は農水省OBで、「食品業界の権威」とも呼ばれる。今でも省内に影響力を持ち、「突き詰めれば、森氏の了解を得られないと、法案には合意できない」（農水省幹部）という。最近では厚生省の担当者も、協議の内容を森実理事長に連絡しているほどだ。

その森実理事長は「二月になって、厚生省が業界ごとに説明会を開いたと思ったら、今度は通産省と合意して別の案が出てきた。これでは納得できない」と話す。

農水省幹部も「厚生省は食品衛生法や薬事法で業界を取り締まる役所だ。米価決定などで徹夜の折衝を続けて落とし所を探る我々とは、行動様式が違う」という。

一方、環境庁は、「関係省庁が協力して今国会中にまとめてほしい」（森仁美事務次官）との方針だが、幹部の一人は「中途半端の内容なら今国会でまとまら

読者のみなさまへ――お知らせとおねがい

▼誌代切れになっていらっしゃる方には、振替用紙を同封して継続をお願いしています。ご中止の方は、恐縮ですが必ず電話またはハガキで編集部までその旨ご一報ください。ご連絡がないと、ご継続としてそのまま送らせていただきます。

▼切手でのご送金は、事務処理上たいへんに手間がかかるということが分かりましたので、ご送金はどうぞ振替でお願いいたします。

▼お友達と回し読みをしている、というお声をよくききますが、お一人が一冊とってくださったらこんなに嬉しいことはありません。どうぞよろしくお願いいたします。

女の政治日誌

―四月から六月まで―

▼揉めに揉めた戦後五〇年不戦決議にようやく一応の決着がつきました。残ったものは何ともいえない後味の悪さです。

そもそもこの不戦決議というもの、「何もしない内閣」の汚名を返上、人気回復をもくろんで社会党が始めた点稼ぎ行為という印象を受けたのは私だけでしょうか。

しかしその結果は、「日本という国はやはり、過去の戦争を侵略とは思っていないんだな」という印象をアジアの国々に与えて一巻の終わり、のお粗末。やり切れません。

▼太平洋戦争の評価を巡って、奥野誠亮氏はじめ閣僚級の政治家のなかから、繰り返し繰り返し「侵略否定」の発言が飛び出してくるのはどうしてなのか、今回試みた対談で、多くのことがわかったような気がします。

政治家にとって何よりも大切なのは票田です。支持者です。国民の常識からかけ離れた発言のように見えていても、その発言が、自分自身の票田を固める効果を持つならば、政治家は何を口走っても怖いものなしではないでしょうか。実際、国家のために赤紙一枚で強制的に戦争にかりだされ、幸い生きて帰れば「侵略したのはお前たちだ」と罵られる。兵士たちのやり場のない気持ちは分からないではありません。

しかし復員してきた兵士たちが、「あやまった戦争に駆り立てられた僕たちは間違っていた。二度と再び戦争はおこすまい」と思うのか、「あれは侵略ではなかった」と信じるかは、主として彼らがどこで、どんな戦いをしてきたかという体験の差に基づいているようです。

▼人間にとって「体験」ほど大切なものもないけれど、体験だけにとらわれても大局を見失うことになる、と痛感させられるのです。

▼「容器包装に係わる分別収集及び再商品化の促進に関する法律」という長ったらしい名前の法律が国会で成立、マスコミも市民も、大体のところ、これでゴミの問題に曙光がさした、と好意的な反響。

それに対して、とんでもない、これはザル法だ、と声をあげたのが「ゴミ危機への道を探る市民フォーラム実行委員会」の人々です。

世話人の酒井さんの文章を掲載させていただきましたが、じっくり読み込むと、たしかにこれはザル法ではないか、と思われることしきり。

男女雇用機会均等法のときにも、成立当初から、肝心かなめの男女差別の禁止が「努力目標」にとどまり、禁止規定がないために、ザルだ、ザルだ、という人と、いや、ないよりましだ、という人の二派に分かれたのでした。

成立後一〇年をへて、不況が労働市場に影を落としているいま、女子学生への就職難というかたちでこの法律がザルである正体ははっきり見えてきています。

包装廃棄物新法がよい法律なのか、それとも市民に新たな負担を負わせる大量ゴミリサイクル社会の到来につながるザル法ものなのか、この新法は均等法よりはるかに早く、その正体を表すでしょう。

▼青島都知事の世界都市博覧会の中止決定は、行政が始めた建設事業を、都民の総意で中止したという前代未聞の出来ごとでした。この決定の及ぼす影響ははかり知れません。

堂本暁子参議院議員のように、NGOを政治の世界につなぎ、新しいかたちの市民政治の実現に道を開こうとする先駆者も出始めています。

公約を守り、市民の総意を大切にする知事の出現は、新しい政治の時代の幕あけを象徴しているのかも知れません。地方選での女性の躍進にも、明るい未来の兆しが見えています。

▼いずれにせよ、党利党略の永田町のサル芝居にうんざりして、私たちが政治への関心を失うとしたら、結局世の中はその手の政治家に動かされてしまいます。政治をあきらめず、私たちの真の代表を議会のなかにふやし、日本をほんとうに住みよい社会にするために、がんばろうではありませんか。

▼雨の多い季節になりました。みなさまお元気で！

季刊　ファム・ポリティク（政治的女性）一九九五年夏号（通巻八号）　一九九五年六月二十四日発行　●編集・製作／わいふ編集部　絵／西田淑子　表紙レイアウト／林佳恵
発行人／田中喜美子　発行所／（株）グループわいふ　〒一六二　東京都新宿区矢来町一一五－四〇六　☎（〇三）三二六〇～四七七一　FAX（〇三）三二六〇～四七七三
定価三〇〇円　送料九〇円　年間購読料四冊分送料共一五六〇円　市販しておりませんのでご注文は直接編集部へ　郵便振込先東京七－七一八三〇五　ファム・ポリティク編集部